ピアニスト 上原ひろみさん

華奢な体からは想像もつかないパワフルな演奏で世界中の聴衆を魅了する上原ひろみさん。メンバーとして参加したアルバムが米国の第 53 回グラミー賞最優秀コンテンポラリー・ジャズ・アルバム賞を受賞したことは記憶に新しい。海外では Hiromi（ヘローミーと発音する）と呼ばれ，世界を席巻するひろみさんに，音楽に対する想いやツアーのこぼれ話を語ってもらった。そして法律との意外な接点も。　（聞き手・構成：雨宮　慶）

＊編集部注：インタビューはアルバム発表前，グラミー賞の発表前の 2011 年 2 月に実施した。

―― 3月に新しいアルバムを発表されるご予定ですが，どんなアルバムなのでしょうか。

“Voice”というアルバムで，人間の心に持っているボイスというか感情をテーマに，いろいろな感情をクリッピングして作品にまとめました。感情って必ずしもポジティブなものだけではなくて，ネガティブだったりダークだったりするものもありますが，音楽というフィルターを通すことによって，すべてが浄化されていくという音楽の力を常に感じていたので，そういうところも含めて感情をテーマにした作品を作りたいなと思って。

―― 前作はツアーで訪れた各地の情景や旅をテーマにされていましたが，今回は感情をテーマにしようとされたきっかけみたいなものはあったのですか。

きっかけとなる出来事というのは特にないですけど，アルバムの題材となる部分というのを常に探しているんです。そうしている中で，これをテーマにしたら面白そうだなと思ったんです。

―― 新しいアルバムは，これまでのご自身のバンド，ソロ，（グラミー賞を受賞したバンドである）スタンリー・クラーク・バンドなどとはまた違うメンバーになっていますが，新しいメンバーと作品を作られた経緯を教えていただけますか。

ベースのアンソニー・ジャクソンとは，一番最初のデビューアルバム，そして2枚目のアルバムで一緒にやっていて，そのときはゲスト参加だったんですが，いつかきちんとフルアルバムを一緒に作りたいなという思いがありました。それで，アンソニーとトリオ作品を作りたいなと思う中で，だんだん欲しいドラムの音というのが明確になっていって，サイモン・フィリップスの音が欲しいなと思ったんです。そこでサイモンに頼んで参加してもらいました。リズムセクションとしては最高に気持ちがいい二人でしたね。

―― このメンバーでツアーをされるのですか。

はい。6月にアメリカでニューアルバムが発売されるので,その6月にアメリカを皮切りにツアーに入ります。

―― ツアー，レコーディング，作曲，プロモーションの活動など，日数的には1年のうちそれぞれにどの程度割いているのですか。

ツアーは，去年は111日167公演。レコーディングは3日，作曲は1年中。常に。毎日です。

―― お休みはあるんでしょうか。

はい，時たまありますね。

―― お休みの日もやっぱりピアノを弾かれるんですか。

もちろん，弾きます。

―― お酒を飲みながらピアノ弾いたり…。

お酒を飲みながらはいいですね，お酒を飲みながら弾くのは，普段やっぱりできないので。無責任なピアノの弾き方をしたい。仕事は毎日責任がありますから，責任を放棄したというピアノは楽しいですね。それが，オフのときの楽しみですかね。飲みながらふらふら…ほろ酔いピアノ（笑）。

―― ひろみさんといえばライブ，それも即興演奏というイメージが強いですが，ライブの魅力って何でしょうか。

ライブの魅力は，一瞬でなくなる“儚さ”じゃないですか。やっぱりその瞬間，そこにしかない，そこにいる人しか体験できない振動だったりとか，本当に生ものだからじゃないですかね。それがライブの醍醐味ですね。

また同じ音を作りたいとか，そういう希望はまったくないんです。同じ景色を2回見て，1回目のときと同じぐらい感動することって絶対にない。それが，やっぱりちょっと寂しかったりはしますよね。すごいもの，すごい景色とかを見ちゃったときって，そこですごさを感じておかないと。また同じところに明日来たり1か月後に来ても，今日を超える感動は，同じ視点からは絶対あり得ない。初めての時ってそのものに対して自分の心が完全に無垢じゃないですか。それに敵うものがないですよね。事前にまったく何も情報がないというか，体験したことがない世界。1度体験したことを，繰り返すのは全然違うから，絶対毎日違うルートを通りたいと思うんですよね，ライブでも。

―― 例えばすごく盛り上がったライブがあって，これはすごく自分でもよかったと思った。でも今度は違う盛り上がり方，感動のしかたというのか，そういうのを目指すというような感覚でしょうか。

そうです。ものすごく大変ですけどね。山登りに例えるのが好きなんですけど，頂上が本当にお客さんと一緒に何かを分かち合える瞬間で，その前の日に素晴らしい滝を見つけたとします。そこに行けば滝があるというのが分かっている時点で――滝のところを通っても昨日の感動がないと分かっている時点で，あえて滝が見えないルートを取るんです。行ってみたらあまり大したことない草花しかなかったみたいなこともあるんですごくハイリスクですけど，やっぱりそこは勝負に出ないと面白くないですよね。何かしらあるんじゃないかと思って，ずっと探しながら行くと，また秘宝があったりするんですよ。

――演奏の中で，違うルートでリスクを取るというのは，普段のひろみさんの演奏や言動からすごくすごく伝わってきているように感じる一方で，音楽家でない私がどれだけ理解できているのか自信がないところでもあります。

会話なんですよ，音楽って。今の私たちの会話でも，一応質問は決まっているかもしれないけど，私が話すことで何か違う方向に行ったり脱線したり，いろいろなことがあるじゃないですか。私たちも曲は決まっているけど，いろいろなことがあって…。同じ話をしても，楽しくないじゃないですか。集中すれば集中するほど，いい会話が生まれて。毎日何か違う話をしたいなという思いで，いろいろなことをやっているんです。リスクが大きければ大きいほど，スリリングで楽しいですよ。

今日を超える感動は，
同じ視点からは絶対あり得ない。
だから毎日違うルートを通りたいと
思うんですよね，ライブでも。

上 原 ひろみ

── リスクが現実化しちゃったことはありますか。あちゃーっという方向に行ったとか。

もちろんありますよ。わーっ，これどう収拾をつけるんだろうということもあります。でも，予定調和よりは全然いいです，こういったらここでこう盛り上がって，こうすればよかったというルートほど，つまらないものはないですから。

プロとして最低限のレベルというハードルは毎日きちんと練習していれば，クリアできるんですよ。でも，その日の冒険として，自分が越えたいハードルというのはまた別にあって，それは自分でコントロールできないところもあるんです。地図に書いてないことを，毎日探そうとしているんです。難しいですけど，だから，楽しいのかなと思うんですよね。どういうふうになるのか分からないから。

お客さんが喜んでくれたら，何か届いたな，ちゃんと縁で結ばれたなと思うんです。それが，強ければ強いほど嬉しいですね。でもその喜びとは違う自己満足の喜びもあって，やっぱりまったく弾いたことがないことを弾きたい。この曲はこんな可能性を秘めていたんだとか，私はこんなことが弾けたんだと思えたときとか，「へーっ」て自分で自分を驚かせる瞬間に向かって行くんです。チャレンジなんですね。

演奏をしている中で，何となく，この入り口何か面白そうみたいな予感がするんですよ。それで入ってみたら，意外に暗かったりして。でも，意を決して入ってという冒険なんですよね。

── 扉みたいなものがあると，入らずにいられない感じなんですか。

そうですね。やっぱりそこに入って，何かをつかめたときの喜びを知っていますからね。そういうところには，果敢に向かっていきたいなという気持ちはあります。

できないことが多すぎて，新しい発見は毎日あるし，自分ができないことにも常にぶち当たるので。それで，あ，これ，できるようになったと思うと，またさらにそれから生じるできないことが浮き彫りになったりとか，常に自分の未熟さと向かい合っていくというのかな。完璧にピアノという楽器，音楽をマスターしたと思うことは一生ないと思うんですよね。

音楽に対して，すごく欲望があるんですよね。何かもっと知らない世界を見たいというか，もっとうまく表現したいという思いが突き進む理由というか。

── ひろみさんは，世界中を非常にタイトなスケジュールで飛び回っていますが，世界ツアーというのは日本のツアーとはずいぶん違うんですか。

日本ツアーは音楽のことだけに集中できて，ありがたいご褒美ツアーですね。ピアノも間違いなく言ったものが来ます（笑）。海外だと，そういうレベルから戦っていかないといけないんです。そんなびっくりするようなことは日本ではないですね。例えばステージに

お水がないとすごい脱水症状になるので，お水がないというサインをステージから袖に送ったら，その会場全体のどこを探しても「水」というものは存在しないとか。

── 演奏以外のイベントに出演されるときなどにも，そんなびっくりするようなことはありますか。

いろいろありますよ。取材というので行ったらタラバガニ漁の船に乗ってタラバガニを持ったところを写真に撮るとかもありましたし，この間フランスのマルシアックにいたときは，コーン畑を走っている映像が欲しいと言われて，コーン畑を走りました（笑）。「フィールド・オブ・ドリームス」みたいな映像ですね。英語で「コーン畑を走るのはちょっと…」とか言っても通じなくて。

「ラン」とか言われて，「まあ，いいや。オーケー。」って，それで走ると「グレート！」とか言われて…。「この映像，ジャズフェスティバルとどうつながるんだろう。」と思いながら走りましたけど（笑）。でもそのタラバガニの映像にしても，コーン畑の映像にしても，見てないんです。

── 毎年行かれるところと初めて行かれるところとで違いとか，逆に共通点を感じることはありますか。

初めて行く場所と2回目に行く場所は，やっぱり知っている人がいる，いないの差はありますよね。初めましてと言っていたときから，ああ，また会えたねと言うのは全然違います。ただ演奏に対する気持ちというのは，どこであろうが，あまり変わらないですね。常にこれが最初で最後と思ってやっていますので。

── 世界中のステージで，お客さんの顔とかは割とはっきり見えるんですか。

クラブだとお客さんとの距離がすごく近いですし，何日間もの公演だと，毎日来られる方もいますので，そうすると顔を覚えますよね。各町の代表的な顔みたいなのもあって，この人を見ると，ここに来たなと思うこともあります。

── そういう方々に対してありがとうという気持ちがすごく伝わるステージを私も何度も拝見したのですが，各地のこういう顔が来ているなと思ったら，その方々にメッセージを伝えたいというお気持ちで演奏されておられるのですか。

そうですね。やっぱり伝える仕事なので，伝える相手がいないと成り立たないですから，来ていただいてありがたいなという気持ちを常に持っています。毎回来てくださる方とかには，いつもすみません（笑）という感じです。いや，もう本当に皆さんのおかげです，ステージに立てているのは。本当にそうですもんね。

── ひろみさんは米国の音大に留学される前に日本の大学の法学部に在籍されていましたが，その時代の思い出があればお聞かせ下さい。

普通に授業で憲法，民法，刑法をやりましたよ。『ポケット六法』を読んでいましたけど（笑）。テストとか付け焼刃な感じのあれですね。でも音楽が人生の軸になってない人たちとたくさん出会えたということがすごくよかったです。その後音大に行くんですけど，周りは全員ミュージシャンじゃないですか。そうじゃない環境で過ごせたというのはすごくよかったです。

── 弁護士に対してどんな印象をお持ちですか。

大学の同期を見ていてもなるのが大変，なってからも大変だなと思います。高校の友人もニューヨークで弁護士になりましたが，本当に頑張り屋で，すごい根性だなと思います。

プロフィール　うえはら・ひろみ

1979年生まれ。6歳よりピアノを始め，17歳の時にチック・コリアと共演。1999年にボストンのバークリー音楽院に入学し，在学中にジャズの名門テラークと契約。2003年にアルバム「Another Mind」で世界デビューし，その後発表するアルバムが日本や海外で数々の賞を獲得している。世界中のジャズ，ポップス，クラシック界のトップミュージシャンやタップダンサー熊谷和徳，笑福亭鶴瓶など幅広い分野のアーティストと共演している。アルバム「スタンリー・クラーク・バンド　フィーチャリング上原ひろみ」は米国第53回グラミー賞最優秀コンテンポラリー・ジャズ・アルバム賞を受賞。最新作は2011年3月発売の「ヴォイス」。